

氏 名(本 籍)	平 山 祐一郎 (神奈川県)
学 位 の 種 類	博 士 (心 理 学)
学 位 記 番 号	博 甲 第 1,615 号
学位授与年月日	平成 9 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	心 理 学 研 究 科
学 位 論 文 題 目	作文指導における言語連想法の効果に関する教育心理学的研究
主 査	筑波大学教授 教育学博士 福 沢 周 亮
副 査	筑波大学教授 教育学博士 太 田 信 夫
副 査	筑波大学助教授 茂 呂 雄 二
副 査	筑波大学教授 桑 原 隆

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、小学校児童を対象とした作文指導において言語連想法を使うことの効果を、教育心理学の立場から明らかにすることにある。具体的には次の通りである。①児童の作文に対する意識調査を行い、作文に対する好き嫌い、作文に対する困難感、作文に対する態度・経験の諸問題を検討する。②連想法を取り入れた作文指導法についての実験を行い、事前連想時間の設定の問題、作文産出量の増大効果の問題を検討する。

本論文は、4部、11章、本文150頁、引用文献10頁、図表42葉より成っている。

第Ⅰ部 序論

第1章 作文の心理学的研究について

第2章 作文と言語連想

第Ⅱ部 調査

第3章 児童の作文に対する意識調査

第4章 作文に対する困難感構造の把握

第5章 作文に対する態度・経験と困難感の関連について

第Ⅲ部 実験

第6章 連想法を取り入れた作文指導法の研究・実践例の概観

第7章 事前連想時間の設定に関する実験手続きの検討

第8章 作文産出量増大効果の確認

第9章 作文産出量増大効果の原因の吟味

第Ⅳ部 総括

第10章 調査・実験の総括

第11章 本論文の概括と今後の課題

第Ⅰ部では、先行研究の概観と問題の設定が行われたのであるが、作文産出の困難さが吟味され、その打開可能性が検討されて、連想法を取り入れた作文指導法の有効性の検討が主目的として提出された。

第Ⅱ部では、第Ⅲ部で実験的検討を行うための前段階として、作文に対する意識調査が行われた。その結果、調査1～3では、小学校4～6年生を対象として、学年が上がるにつれて作文が好きでなくなっていくこと、学

年が上がるにつれて文章の構成など比較的高度な困難感を自覚しはじめること、作文に自信がある児童とそうでない児童では「文字がきれいに書けない」といった表層的なレベルの意識に差があることなどが明らかにされた。調査4では、小学校5年生を対象として、作文に対する困難感についての因子分析が行われ「構想」「表現」「評価」「時間」「作文の基本技術」の5因子が抽出された。調査5では、小学校3～6年生を対象として、「作文に対する態度・経験」と「作文に対する困難感」の関連が検討され、因子分析の結果、「作文に対する態度・経験」では「自己関与性」と「他者関与性」の2因子が抽出され、「作文に対する困難感」では「構想」「表現」「評価」「時間」「技術」の5因子が抽出された。更に、これらの関係を検討した結果、作文に対する態度・経験は、構想上の困難によって比較的良好に説明されることが明らかにされた。

第Ⅲ部では、研究・実践例の概観が行われ、それらを踏まえて実験的な検討が行われた。実験1-1では、小学校5年生を対象として、事前連想時間を実験者が設定したところ、事前連想有り群の作文産出量が、無し群のそれよりも多いことが明らかにされた。また、実験1-2では、小学校5年生を対象として事前連想時間を書き手の任意として作文を書かせたところ、事前連想有り群と無し群との間に差がないことが明らかにされた。以上の結果、事前連想時間は、実験者があらかじめ設定する必要があることが明らかにされた。実験2では、小学校5年生を対象として、作文産出力がほぼ等しい2群について、事前連想の有無による効果が検討された。その結果、事前の連想が、その後の作文産出量の増大をもたらすことが明らかにされ、その効果は、特に、作文産出力が低い児童に顕著であることが明らかにされた。実験3では、小学校5年生を対象として、事前連想の条件に合わせて、非表出群、非参照群、参照群の3群を設定し、共通の条件のもとでの第1作文と、それぞれの条件のもとでの第2作文を書かせたところ、作文産出量は、非表出群で第1作文>第2作文、非参照群で第1作文≒第2作文、参照群で第1作文<第2作文で、連想語を書き出して作文時に参照できることが作文産出量の増大に寄与することが明らかにされた。

第Ⅳでは、まとめと今後の課題が論じられ、作文産出量の増大効果について、いくつかの考え方が検討された。また、作文指導に関する心理学的研究の可能性についての考察が行われた。

本論文の第一の目的は、作文指導において言語連想法を取り入れることの効果を明らかにすることにあるが、作文を書かせる前に、言葉による連想をさせ、それを書き出させて、参照させながら作文を書かせると、作文産出量の増大が認められることが明らかにされ、作文量の点で有効であることが明らかにされた。また、作文産出力の低い児童に対して効果の大きいことが明らかにされた。

第二の目的は、作文に対する児童の意識を探ることにあるが、全般的な意識調査の結果、学年が上がるにつれて作文が好きではなくなっていくこと、学年が上がるにつれて比較的高度な点についての困難感を自覚しはじめること、作文に自信がある児童とそうでない児童との間に表層的なレベルでの意識差が認められることが明らかにされた。また、作文に対する困難感については5因子が抽出され、作文に対する態度・経験については2因子が抽出され、更に、作文に対する態度・経験は、構想上の困難によって比較的良好に説明されることが明らかにされた。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、小学校児童を対象として、作文指導において言語連想法を取り入れることの効果を実証的に検討した研究である。教育実践の中で経験的に主張されていることを、教育心理学の研究法によって実証的に明らかにした点は、国語科についての教科心理学を一步進めるものといえる。特に、作文を書かせる前に言語連想をさせ、それを参照させながら作文を書かせることが、作文産出量を増大させること、また、そのことは作文産出力が低い児童に対して有効であることを明らかにした点の意義は大きい。

ただ、一方では、作文指導であるだけに、質的な面への関わりについての検討がほしかったこと、文章化過程

と言語連想との関係についてももっと検討がほしかったことは否定できない。

しかし、条件が複雑であるためになかなか研究が進まないといわれている教科心理学研究の中で、上記の成果を上げた点、更には、作文指導の領域に実証的な知見をもたらした点の意義は大きいと認められる。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。